

タクシー物語

K・M・H

◆ エピソード(1)——深夜のおしゃべり——

⑥「〇〇まで。ごめんなさい、こんなにおそく……」

⑦「いゝえ、丁度、そちらへ帰るところでした。

今夜はもう切り上げるつもりだったんです。わたしんちは〇〇の先ですから、そっち方面のお客さんでラッキーでした。空車で帰るよりは、ずっと助かります。」

⑧「まあ、それではお互いに助かったのネ。それ

は、ようございました。」

⑨「お客さん、東京の方ですね。それと、ちゃんとした方の奥さん？ それに、もしかしたらお仕事もお持ちで？」

⑩「まあそんなところかも知れませんが……でも、どうして？」

⑪「いや、きちんとした言葉を使いなされるから。

この頃の若い人とは大ちがいです。皆さん、身なりは立派だが、言葉使いはメチャクチャですからね。わたしらみたいなのは、召

し使いか何かのようにあしらわれます。『一寸、一寸、オジサン、そっちじゃないよ。こっち曲がるんだって言ったじゃないか』なんて、きれいな娘さんが怒鳴るんですからね。」

⑥客 「みんな忙しいから、イライラしてなさるんでしょう。東京はゆとりがなさすぎるんですよ、きつと……。」

⑦運 「忙しいのはお互い様ですがね、ありがとうございますか、すいませんぐらい言ってもバチは当たりませんでしようよ。まあ、親や学校のしつけが悪いんじゃないですか。」

⑧客 「そうかも知れませんが……。運転手さん、お子さんは？」

⑨運 「三人ですよ、男の子ばかり……。だから、親爺としては、もう暫く頑張つて学費ぐらい稼がなきゃと思つてるところです。いやあ、この頃は、男の子は大学ぐらい出さなきゃネ。」

⑩客 「それは大変ですこと。でも、お楽しみです

ね、男のお子さんばかりなんて……」

⑪運 「いやあ、小さいときは大騒ぎでしたがネ。まあ、一人はもう大学生になりました。次が来年受験です。」

⑫客 「まあ、暫くは受験々々でお大変ネ。でも、もうほんの一時ですネ。大きくなつてしまえば、アツという間ですもの……。」

⑬運 「お客さん、お子さんは？」

⑭客 「ええ、もう独立しました。」

⑮運 「じゃ、ご主人とお二人で？」

⑯客 「ええ、静かになりました。子どもつて不思議なものですネ。一時は受験やら就職やらと戦争みたいでしたのに。サーッと潮が引いていくみたい……。」

⑰運 「羨ましいみたいですネえ。じゃ、いまは、悠々とお二人で……。それに、奥さんもお仕事があるなざるなんて、理想的ですね。」

⑱客 「いいえ、ただ、たまたま、そういうめぐり合

わせで、仕事に復帰出来ただけですけどネ。あら、そろそろね。あ、その角を曲がってください。右側の二番目の家です。

どうも、ありがとうございます。

⑤ 「どう致しまして……。奥さん、いま、おつりを差し上げますが、一寸、クイズを一つ。いいですか？ クイズですよ。

綿一キロと鉄一キロと、どちらが重いでしょう？ 奥さん、わかりますか？」

⑥ 「どちらも一キロだから、同じって答えるんですけど？ ちがいますか？」

⑦ 「ハハハ、それがちがうんです。もちろんネ、秤にのっければ同じですけど、足の上におっことしたと考えるとちがうなさい。綿は痛くないけど、鉄の方はものすごく痛いでしょう、重さの感じというのがちがうんです。」

⑧ 「なるほどネ、客観的な重さと、主観で感じる重量感とでもいうのかしら。明らかにそういうこ

とはありますでしょうね。運転手さんは、なかなか哲学者ネ。」

⑨ 「いやあ、お客さんがいいお方だから、こんなおふぎをさせて貰いました。おかげ様で今日はいい一日でした。ありがとうございます。じゃ、おつり……。ハイ、どうも、おやすみなさい。」

◆ エピソード(2)——自殺志願者？——

⑩ 「ああ、すみません。手を上げてなさるのに気がつかなかった。どうぞ、のってください。」

⑪ 「まあ、よかった。乗車拒否かと思いました。だって、知らん顔で行き過ぎてしまうんですもの……。バックしてらした時は、何事かとビックリしました。」

⑫ 「ほんとにすいません。気が付かなかったんです。ポーツと考え事してたんですかねえ。」

④客 「明け番ですか？」

④連 「いいえ、いま出てきたところなんです。この頃、もう、そんなに頑張る気がなくて、気ままにしています。夜なんか走りません。その点、個人タクシーは気楽ですから…。一日中、家にいても、一人っきりで仕方がないから、走ってるだけです。」

④客 「運転手さん、ご家庭は？ お一人暮らし？」

④連 「ええ、カミさんに死なれました。子どももないし……。ついつい、ポーツと走ってしまうのは、何だか気持ちが悪くしてしまいました。子どももいません。稼いだってどうなるもんじゃなし……。」

④客 「それは、お淋しいわね。運転手さん、ご郷里は？」

④連 「佐渡ですが、もう誰もいません。帰ってみたいけど、浦島太郎みたいじゃないしょう。」

④客 「そうかしら、でも、佐渡っていい所でしょ。」

う？」

④連 「カミさんでも生きてれば、一緒に帰るんですがネ、もう、どうでもいいという気分です。このまま、死んじゃってもいいかななんてネ……。」

④客 「まあ、でも、またいいこともありますよ。元気で働いていなされば……。じゃ、お気を付けて。どうも、ありがとう。」

◆ エピソード③——桜メール——

④連 「お客さん、ものすごく急いでなさる？ 少し、時間ありますか？ 廻り道したいんですけど……。」

④客 「どうして？ 道路工事が何かですか？」

④連 「いえネ、一寸、お見せしたいものがある……。何、お急ぎならいいんです。」

④客 「何でしょう？ 少しぐらいなら廻り道しても」

いいんだけれど……。」

④ 「OK。じゃ、一寸、遠廻りします。何、ほんの一寸だけですよ。」

⑤ 「まあ、見事な桜！　まるで花のトンネルね。こんな所があるなんて知らなかった。何と見事なんでしょう！」

⑥ 「見事でしょう。すっかり咲き揃いました。出来るだけ、沢山の人に見て貰いたくてネ。花の好きそうな方は、廻り道して花見をして頂くんです。」

⑦ 「まあ、そのための廻り道でしたの。それにしても、何と見事な！」

⑧ 「でしょう。花のトンネルです。有名じゃないけど、この辺では一番いい桜並木ですよ。どうです？　見事でしょう？　どうです？」

◆ エピローグ



タクシー・ドライバーは、都会という荒海の孤独な漂流者。だから、二度と会うこともない乗客との間に、束の間の交流を求めのかも知れない。それにしても、三人の運転手さんたちは、今日は、どこを走っていることだろう。どうぞご無事で！